

## 『芸術と客体性』第3週発表班プレレジュメ

高橋・菅井・木村・ジャスティン

はじめに

私たち第3週目発表は、マイケル・フリード著「芸術と客体性」を扱います。今回もまたプレレジュメとしてテキストにおける要点の整理を掲載します。宿題については特に用意していないので、演劇性、関係性など、キーワードとなるものには特に注意を払いながら文献の理解に徹してきてください。

## I. リテラリズムの芸術

### ■ リテラリズム (literalism) = 直写主義

- ・ 大いにイデオロギー的である  
= 一般的に広まった状況の表れ
- ・ ひとつのポジションを定義づけたり位置づけたりすることを切望  
→ モダニズムの絵画や彫刻を足がかりにして達成しようとする

### ■ リテラリズムが絵画に反抗する事情

- ① ほとんど全ての絵画にある関係性
- ② 絵画のもつイリュージョンの偏在性

ドナルド・ジャッド

- ・ 矩形 (キャンヴァス) の内部の諸所の形体や表面は、統一体に従属している  
→ 1 枚の絵画は一個の事物
- ・ 矩形は形式 (フォーム) であり、平面を強調しようとする単純さを求められる  
→ 矩形内部でのアレンジを制限する  
→ 単一の表面上 (キャンヴァス) からの脱却として 3 次元へ向かう  
「現実の空間は本質的に平面的な表面の上の絵具よりもずっと強力で明確 (スペシフィック) なのだ。」

3 次元では、支持体の形式の問題を解消し作品のアレンジに制限をかけない

### ■ 彫刻に対するリテラリズムの態度

- ・ ジャッド、ロバート・モリスは彫刻に反対  
<なぜ?>  
彫刻は部分部分、付加することによって全体から分離し、作品内部で諸所の関係性を引き起こすため
- ・ ジャッド、モリス (リテラリスト) の共通価値  
「全体性、単一性、分割不可能性」  
1 つの作品が、ほとんどできる限り「1 つの事物」であることの価値を主張  
<その方法>  
モリス  
「強力な※ゲシュタルト」、「※ユニタリーな形態」の使用  
ジャッド  
全く同じ構成単位の反復を通じて達成され得るような種類の全体性  
→ 「次から次へと連なる連続性といったような単なる秩序」

決定的要因は形体

→ 客体の全体性を保証するものは形体の単一性

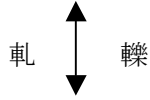
※ゲシュタルト…全体性を持ったまとまりのある構造

ユニタリー…単一の、統一された

## II 芸術の形態

### ■形態の問題

客体の基本的特質としての形態



絵画のメディアムとしての形態

- ・ 絵画が成功するか失敗するか左右する能力
  - ①形態としての説得性を保持する能力
  - ②その説得性を完全に自らに刻印する能力
  - ③その説得性を強要する能力
  - ④1～3を何とか免れるか回避する能力
- ・ 問題の絵画もしくは客体は、、、  
絵画として経験されるのか or 物体として経験されるのか

<モダニズムの絵画の立場>

客体性の打破もしくは保留は不可避

→形態は絵画にふさわしい形態でなければならない

<リテラリズムの芸術の立場>

客体性をそれ自体として見いだして投げ出す

→諸客体の所与の特性としての形態にすべてを賭ける

### ■現前の効果

サイズ、非一芸術の外観によって与えられ得る

<非一芸術とは？>

絵画（2次元）には適用できなくなった

→芸術と非一芸術の境界線は3次元的なものの中に探さねばならなくなった

グリーンバーグ

最小限度の「興味深い」出来事しか目に提供しないような「不活発な」外観

非一芸術の状態に最も近づいているのはドア、テーブル、空白の紙片など

→フリードが客体性と呼んできたもの

### ■モダニズムの絵画の展望からみると

- ・ リテラリズム（客体性の擁護）は正反対の感性
- ・ 客体性を芸術と正反対のものにしているのは一体？

### Ⅲ演劇

#### ■演劇

客体性の擁護（リテラリズム）は、演劇の新しいジャンルのための口実。  
そして演劇とは芸術の否定である。

<かつての芸術（モダニズムの芸術）>

作品から受け取られるべきものは、内部に位置している

<リテラリズムの芸術の経験>

ある状況における（観者も含む）客体の経験

→人はその作品と同じ空間の中に自分自身も存在しているのだと意識する

・その意識はゲシュタルトの強度で高められる

→客体のサイズに比例して、観者にそれからの距離をとらせる

→観者を主体、問題の作品を客体とする

#### ■状況の中の客体

モリス

客体性を通じて現前性を達成したい

<そのためには>

①客体性にある一定以上のサイズが必要

②客体が状況の中心もしくは焦点にあり続けなければならない

→しかし状況は観者に所属している

→リテラリズムの芸術作品である諸事物は、観者に直面していかなければならない

客体性は、状況の中で確立され、状況に少なくとも部分的に依存している

#### IV～VI

##### ■リテラリズムの現前

リテラリズムの押しつけがましさの作用、またしばしば攻撃的でさえある作用であるのみならず、そういった作品が観者に無理強いする特殊な共犯性の作用。

##### ■三つの理由

- 1・多くのリテラリズムのサイズが人間の体のサイズに近づけてある。  
→人の代理をするような何か。
- 2・リテラリズムの諸理念に日常的な経験で出会う諸々の実財物もしくは生物で最も近いのは他人  
→リテラリズムの偏愛する秩序は自然のうちに根拠がある。
- 3・リテラリズムのほとんどが中空／内側をもっている。  
→擬人的 バイオモーフィック

##### ■ 演劇的

リテラリズムの悪しき所は、それが擬人的であることではなくて、その擬人観の意味が、そしてそれを隠しているという事も同じく、救いがたいまでに演劇的だということなのである。

※ マイケル・フリードは、作品を根本的に演劇的である作品と、そうでない作品との間で区別することを提起している。

## VII 反目し合う演劇と諸芸術

- 演劇と演劇性は、モダニズムの絵画（もしくはモダニズムの絵画・彫刻）だけでなく、芸術それ自体と反目しあっている。

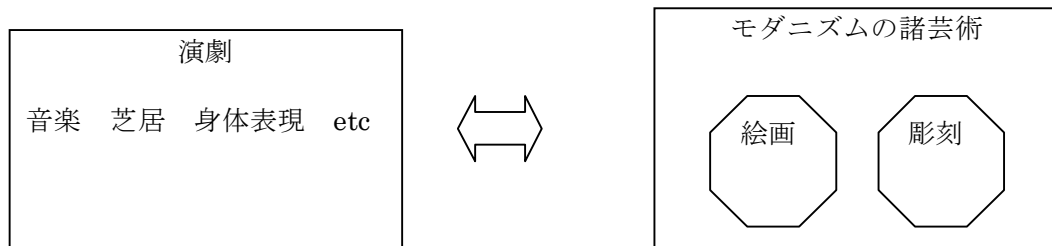
### テーゼ①

諸芸術の成功・残存は、演劇性を打破する能力にますます左右されるようになってきている

- ・演劇は観衆を所有している。そしてリテラリズムの芸術もまた観衆を所有している。リテラリストの感性が「誰でもが理解できるようなもの」「観者ひとりだけに語りかける」という理想を熱望している。リテラリズムの作品が置かれた部屋に観者が入ると、その作品は頑強に観者をひとりにさせること、距離をとらせることを拒む。⇒これはその作品がその人を待ち続けていたようであり、観者がいなければ不完全なものでしかないことを示している。

### テーゼ②

芸術は演劇の状態に近づくにつれて墜落する



上の図のように、演劇は見かけ上、大いに異なる活動を互いに結びつける公分母であり、これが根本的に異なるモダニズム諸芸術の諸々の企てと演劇とを区別する点である。

そしてこの公分母である演劇が、ある**幻覚**を引き起こす

- ↓
- ・芸術間の垣根がいまや崩壊する過程にある
  - ・諸々の芸術それ自体が、ついにある種の最終的な内部破裂をなし大いに望ましい総合へとスライドしつつある

⇒しかし、実際には、個々の諸芸術はそれら各々の本質を構成している諸因習に今よりも明白に関わってきたことなど決してない

ここで述べた**幻覚**から、リテラリスト達は「新しい芸術と樹立する試み」をつき進めていく

テーゼ③

質と価値という概念、そして芸術それ自体の概念は重要である。しかも個々の諸芸術の内部においてのみ全面的に重要なのだ。諸芸術同士の隙間に位置しているものが演劇なのである。

リテラリスト達は、その様々な声明において、自分達の作っているものが芸術であるか否かに関して少なからぬ不確定さを示すと同時に、価値もしくは質の問題を大いに避けてきた。⇒彼らの企てを「新しい芸術を樹立せんとする試み」として記述しても、その不確定さは取り除かれはしない。

	リテラリズム	モダニズム
重要視しているもの	<b>興味</b> を引き出して持続させることができるか否か、つまり <b>興味深さ</b> が重要	作品の質が疑うべくもないような、ある1つの作品の芸術分野内での過去の作品との比較に耐えうるかいなかに関する <b>確信</b> が重要
特徴	↓ 作品の全体性+素材の特殊性 ⇒はかなさの暗示	↓ 現在性+瞬時性 ⇒どの瞬間にあっても、作品それ自体が明示的
補足説明	下記参照	モダニズムの絵画や彫刻は作品の見方が作品自体によって陰らされる。そして連続する永遠の現在の中に存在しているという状態、実際にそのような現在を構成しているという状態に気づかされる。観者が一種の瞬時性として経験するのは、永続する作品自体の創造に等しい。

作品の興味深さ… 一作品全体としての性格と、その作品が作られている素材の全くの特種性（不屈のアイデンティティ）との両方に存している。この不屈のアイデンティティは、その形体の全体性と同様、単に明言されているか与えられているか確立されているのである。  
⇒無尽蔵の経験、終わりのなさの経験



リテラリスト達が客観化しようとしている経験

(ex) 観者が観察するすべてのものはその状況の一部と見なされ(終わらない時間の一部)、それ故にそれら全てのものが曖昧なままに残るような仕方で、その客体についての観者の経験に影響していると感じられる

このような経験の持続への没頭は、典型的に演劇的

⇒あたかも演劇が観者と対面し、そのことで単に客体性の終わりのなさだけでなく時間の終わりのなさによって観者を隔離しているかのよう

この没頭がモダニズムの絵画や彫刻との間の深遠な差異を作っている